

〔骨董集 上編 下前〕三月三日の雛遊 古代のひいな遊びは、平日の玩なりし事は前にいへるが如

し、三月三日を期とせしは、いつれの比歟詳ならず、略中無言抄に、雛、人形の事也とのみありて、季

をさだめず、雜也、此書は天正七年より二とせあまりに、これを記すとあれば、天正の比も、いまだ

三月三日にさだまらざりしか、御傘にも雛を雜とす、増山の井寛文三年印行三月三日の條に云、ひいな

遊こそ慥なる期もあらねば、打まかせては雜なるべし云々、但聊あひしらひあらば、此比の俗に

まかせて、今日の事にも成ぬべし云々とあり、是等を合せ考るに、三月三日を期とせしは、とほか

らぬ事なるべし、天正以後の事歟、三月上旬の巳の日、水邊に祓する事、和漢ともに古し、源氏物語

須磨の卷に、源氏須磨へ左遷の時、三月の朔日巳の日にて、浦邊に出、陰陽師をめて祓せさせ給

ひ、舟にことごとくしき人形をのせて、流させ給ひし事見え、加茂保憲女集に、おほぬさにかきなで

ながすあまがつはいくその人のふちをみるらん、などいへれば、上巳の祓に、天兒を水に流せ

し事もありしなるべし、後世に、三月上旬巳を雛遊の期とせしは、是等の遺意にて、天兒アガガ母子等コの贖

物に酒食を供じ、もろくの凶事を是におはせ、おのれが身を祝ひしが、や、古の雛遊びの

方にうつりて、つひに今の如くにはなれるなるべし、國朝佳節錄、三月三日、兒女制紙人爲翫者、贖

物之義、乃祓具也云々といへり、然則原潔身の神事によりて起りたれば、今の世には、雛遊といは

で雛祭と稱るも、縁なきにはあらざりけり、

古へのひいな遊びは、たはぶれのみ也、今のは、たはぶれの遊びわざにあらず、女は高きいやし

き嫁しては、夫にまがひ男は外をなさめ、女は内をなさむるものなれば、幼時より嫁して、夫

につかふるわざ、家の事も、ひいな遊びにて、そのまねびをなし、手馴ならば、しむるを本意と

すめれば、民の童は、ことに飯かしいわざまで、今これに手馴、家内むつまじき體をまねび、質素

をむれとして、美巧をこのむまじきことぞかし、今の世の女兒の、男女のかたちをつくりて、夫

婦こと、又奴婢のさまなどなして遊べるぞ、かへりて、中昔のひいな遊びにも、かよひ、伊勢の小

米メびビなナいイふフべベきキ、

〔松の落葉〕四比々奈 今の世、三月三日に、女のわらはのいはひごととて、比々奈をかしづきま